



与論小だより

学校教育目標：校訓「至誠」を胸に、未来に挑む子供の育成



ブログはこちら



育みたい力

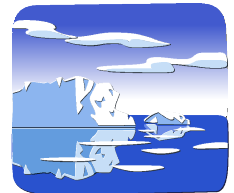
校長 岩元 輝美

新年度がスタートして早1学期の折り返しを迎えようとしています。子供たちもそれぞれ学校生活にも慣れ、個々のもち味を発揮し始めています。すべての子供たちが年度初めに立てた一人一人の目標を常に意識しながら、発達段階に応じた精一杯の取組ができるよう、全教職員で支援していきたいと思ひます。

そんな中、6年生は、最上級生としての意識をもって、与論小学校をより活発で、居心地のよい温かい場所とするために自主的にボランティア活動も始めました。とても頼もしく感じています。一年間、積極的に与論小学校のリーダーとしての活動を充実させ、自信と誇りを身につけて中学校へ羽ばたいてほしいと思ひます。

さて、人は時として気持ちが平常でいられないことがあります。普段なら何でもないようなことに気持ちが高ぶったり、落ち込んだりすることもあります。では、どんなタイプの人間が平常心を保ちながら生活できるのでしょうか？以前、テレビ番組で作家の五木寛之さんの著書の一節が取り上げられていました。とても印象的でしたので、以下に紹介したいと思います。

たとえば、南極でテント生活をしていると、どうしても人間は無精になるし、そういうところでは体裁をかまう必要がないから、身だしなみということはほとんど考えなくてもいいわけです。にもかかわらず、なかには、きちんと朝起きると顔を洗ってひげを剃り、一応、服装をととのえて髪もなでつけ、顔をあわせると「おはよう」とあいさつし、ものを食べるときには「いただきます」と言う人もいる。こういう社会的なマナーを身につけた人が意外にしぶとく強く、厳しい生活の中で最後まで弱音を吐かなかつた、というわけです。これはおもしろい話だと思ひます。礼儀、身だしなみ、こういうことは極限状態のなかでは最後に考えることのような気がします。しかし実際には、そういうなかで顔をあわせたときにきちんと「おはよう」とあいさつできるような人、「ありがとう」と言えるような人、あるいは朝、ほんのわずかな水で顔を洗い、ひげも剃って、それなりに服装を整え、そして他人と礼儀を忘れずに接するという、小さいときからの自分の生活態度をずっと守り続けたようなタイプの人のほうが、むくつけき頑強な熊のような大男よりも、かえって最後までがんばり抜いて弱音を吐くことがなかつた、という。



(「大河の一滴」五木寛之：幻冬舎文庫から)

「小さいときからの自分の生活態度をずっと守りつづけた・・・」とあるように、このような「当たり前」の生活態度を学校、家庭、地域と協力して子供たちに身につけさせることの大切さを感じました。社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難な状況だからこそ、「挨拶」をはじめ、人とのコミュニケーションを大切にしたり、あらゆる人、物、ことに感謝したりする心など、社会の中で生きていくために大切なことを育てあげられたらと思ひます。それはつまり、校訓「至誠～真心をもって人に尽くし、真心をもって事にあたる～」の具現化された姿であると思ひます。